



307号
2025/10

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



学校帰りの仲良し：私が参加した、「蜀の栈道ツアー」の最終都市は四川省広元市の普安鎮という地方都市でした。散歩に出ると、ちょうど下校時の時間帯でたくさんの子供が家路を急いでいました。低学年の子供らは母親や、祖父母らしき人の付き添いがありました。子供の登下校時の付き添い風景は他の地区でもよく見かけました。

(2025年3月 四川省広元市普安鎮にて 佐々木健之)

‘わんりい’ 2025年10月号の目次は18ページにあります

中医学では、「天人相応」という考え方があり、人間の養生は自然の季節の変化に合わせるべきであると考えます。

秋は五行に当て嵌めると「金」に当たり、肺に関係すると考えられます。涼しくなると陽気は内に収まり、空気は乾燥しやすくなります。この時期には咽喉の渇きや咳、肌の荒れなど「秋の乾燥」による症状が現れやすくなります。そのため、秋の養生では「収めること」と「潤すこと」が重要となります。

中医学の古典「黄帝内経」では秋について次のように説明しています。少し難しいですが、ここに引用してみましょう。

「秋三月、この時を容平という。天気は急で、地気は明らかである。早寝早起きし、鶏と共に起き、志を安んずることにより秋の刑を和らげ、神気を収め、肺気を清らかにする」

要約すれば、秋の三カ月間は穏やか、天気は気持ち良く、早寝早起きをし、気持ちをゆったりと構えれば、身体は健やかだ といった意味です。

これにより秋の養生では、精神を落ち着け、外邪に乱されず、肺を潤すことが重要であると考えられます。食事面では、辛くて発散する食材を控え、酸味で収める食材や潤す食材を選ぶことが良いとされます。代表的な食材には梨、ブドウ、サンザシ、蓮根、はちみつ、ゴマなどがあります。

このような養生の考え方にに基づき、11月の薬膳講習会では「蓮根とスペアリブのスープ」を作る予定ですが、ここでは、同じように秋にお勧めの「**蓮根とナツメの牛スネ肉スープ**」を例にとり、秋の養生の考え方をご紹介します。

秋は、冬に備えて身体を補う必要がありますが、度を過ぎるのは良くありません。そのため、このスープは、身体にやさしく栄養を補え、乾燥を防ぎ、胃腸の働きを助けることを主眼とします。

蓮根は肺を潤し乾燥を和らげ、咳を抑える作用があります。牛スネ肉は気を補い、胃を健やかにし、体力不足を改善します。ナツメ（赤ナツメ）は気血を補い、スープに甘みと滋養を加えます。これら三つの食材を組み合わせることで、乾燥による喉の不快感を防ぎ、胃腸の働きを助け、体力や元気を補うという三

点でバランスが取れ、秋に適したスープとなるのです。

■蓮根とナツメの牛スネ肉スープ

材料（3～4人分）：

牛スネ肉 400g、蓮根 400g、
ナツメ 5個（種を取る）、
クコ 10g（好みで）、生姜 3枚、
料理酒大匙1、水 1.5ℓ、塩適量

蓮根は、平性^注で甘味があり、脾・胃・肺経に入り、熱を冷まし潤す効果があります。生で食べると清熱涼血の効果があり、煮て食べると脾胃を補い、血を養う作用をします。秋に、咳や喉の渇き、便秘、胃腸虚弱の方に適しています。

牛スネ肉は、平性、やや温で甘味があり、脾・胃経に入ります。体の元気を補い、胃腸の働きを助け、筋肉や骨を丈夫にする食材です。体力不足や病後回復、胃腸虚弱の方に向いています。

ナツメは温性で甘味があり、脾・胃経に入ります。ナツメは、体の元気や血を補い、働きを助け、心を落ち着ける効果のある食材です。古典では、「中を安んじ、脾気を養い、百薬を和す」と記されており、薬性を和らげる作用もあります。気血不足や疲れやすい方におすすめです。

クコは平性で、甘味があり、肝・腎経に入ります。体の潤いを補い、目の疲れや腰・膝のだるさが気になる方に向いています。

生姜は、温性で辛味があり、肺・脾・胃経に入ります。お腹を温めて冷えを改善し、吐き気や体の不快感を和らげる食材です。スープの臭みを取り、食材の調和をもたらします。

このスープは、秋の養生原則に沿った薬膳スープです。秋の間、定期的にこのスープを摂ることで、冬に向けた体の準備が整い、潤いのある肌を保つことが出来るので、女性におすすめです。

~~~~~

\*注：9月号で紹介したように、中医学では、食材の性格を温性・平性・冷性で見極め、夏に体を冷やすには冷性のものを、冬に体を温める時は温性のものを調理して食します。

## 長春の変わりよう

文と写真＝村上直樹

前回お話したように、私は1991年8月以来、仕事や旅行でたびたび中国を訪れる機会に恵まれた。ただし、回数と合計滞在期間はそれなりにあるものの、いつも短期滞在ばかりで本格的に中国で暮らした経験はない。会報『わんりい』で何人かによって書かれている生活体験記を羨ましく読ませていただいている。唯一の例外と言えるのは、今から28年前、1997年3月末から10月初めまで半年間ほどの滞在である。場所は吉林省の長春だった。その長春を先日(2025年)8月28日から9月2日まで5泊6日で旅行した。1997年の後も、2000年3月と2014年11月の2回ほど長春に行ったが、いずれもやはり短期出張であった。今回の旅行も正味わずか5日間と短かったものの、28年前の記憶を辿り、長春の変わりようを少しは実感できた。

大連で2日ほど過ごした後の8月28日、鉄道で長春に移ることにした。1997年以降、過去2度の長春行きはいずれも航空便を利用したので、(大連から)鉄道で長春に入るのは正に28年ぶりである。ただし、同じ「鉄道」と言っても、1997年は夜行列車を利用したのに対して、今回は高速鉄道(高鉄)を利用した。午前11:11発「吉林」行きG8011号、料金は往復約640元(1元=20円換算で、約12,800円)であった。

話は少しそれるが、中国でも現在、列車の乗車券はネット上(オンライン)で予約するのが一般的である。また、一頃のように乗車券を発券することもなく、身分証だけで列車に乗る。今では、どの駅でも有人窓口で乗車券を購入する人はごく少数である。かつては、私自身の体験でも(つまり、1991年以降のこと)、鉄道の切符を駅の窓口で買うには、かなり苦労した。どの窓口も長い列が出来ており、割り込む人も多く、遠慮しているといつまで経っても買えなかった。言葉の問題は別として、中国人にとっても大変だったと思う。そうした光景はもう全く見られなくなった(以前から街中等にある販売代理店の窓口で予約購入することはできた)。私はまだ、自分自身でネット購入をした経験はなく、有人窓口を利用する。初

めにパスポートを提示することで外国人であるとわかるため、それなりに優しく(易しく?)対応してくれ、ネットで列車番号を確認するなど若干の準備をして臨めば、希望通り買えなかったことはない。

さて、話は当日の長春行きに戻る。乗客はかなり多かった。高鉄を含む大連・長春間の列車本数は決して少なくないが、ネット上でも「候補」(キャンセル待ち)の表示が多く出ていた。中国では9月初めに大学の新年度が始まるため、8月末は全国的に大学新生が移動するシーズンである。そうした大学生も含まれていると思われるが、私と同じく大きなスーツケースを持った乗客も多かった。

列車は定刻をかなり遅れ11:25に発車した。11:40大連北駅(站)を通過する。中国では高速鉄道の全国的な整備が進む中で、新しい鉄道駅の建設も急速に増えた。そうした新駅の名称には従来からのターミナル駅の名称(それは同時にその地域の名称)の後ろに「東西南北」がつけられているようである。この大連北駅も大連市における高速鉄道の主要な発着駅として、2012年12月に開業した(今回私が利用したように、本数は少ないが大連駅発の高鉄もある)。一般に従来からのターミナル駅は市街地の中心にあるのに対して、そうした新駅はやや離れていることもあり、交通の便には少し注意が必要である。

列車はその後、12時半ごろ営口東駅を過ぎた辺りから延々を続くトウモロコシ畑を走り、1:20過ぎに瀋陽駅に到着した。同駅を出発して20分ほど過ぎると車窓から堀越しに「18」と書かれたモニュメントが一瞬、見えた。1931年9月18日に日本軍が中国東北部への侵略を本格化させた、いわゆる「柳条湖事件」(「満州事変」)を後世に伝えるべく建設された「九・一八歴史博物館」の傍らを通過したのである。1:45長春西駅を通過して、2:50過ぎ長春駅に到着した。駅舎は大きく建て替えられたはずだが、出口付近の雰囲気は不思議と28年前を思い出させた。なお、会報『わんりい』では、寺西さんが過去、何回か長春について書いている。とくに2016年10月号と2017年1月号では大連から長春への高鉄利用が話題

にされており、今回の私の経験とも重なる。

現在の吉林省の省都・長春市はかつて日本の傀儡<sup>かいらい</sup>政権が統治した満州国（中国では偽満州国、1932年3月1日から1945年8月18日まで存在）の首都・新京特別市である。至る所に当時の建造物・施設が残されており、それらは現在でも使用されている。長春の都市機能は「経済開発区」、「産業開発区」など外延的に発展しているものの、中心市街地の骨格は基本的に当時のままとと言える。長春駅を起点として南にまっすぐ、大通り「人民大街」が伸びる。この大通りは満州国時代の「大同大街」など、呼び名がさまざまに変わったが、とくに1949年3月には中国と旧ソ連の友好関係を象徴して、斯大林（スターリン）大街の呼び名が付けられ、1996年5月1日に現在の「人民大街」となった。私が初めて長春に行った1997年当時は、新しい名称になったばかりであった。今回の旅行では長春駅にほど近く「人民大街」に面したホテルに泊まった。10階の部屋からは長春駅全体がよく見えた。写真は1997年5月と今回（2025年9月）に



1997年5月に撮った「長春駅」



2025年9月に撮った「長春駅」



「勝利公園」の毛沢東像（2025年8月撮影）

撮った長春駅である。構図は違うが大規模に再開発されたことがわかる。

中国の他の多くの都市同様、長春市においても近年、地下鉄（地鉄）網の発展が目覚ましい。「人民大街」の地下にも、2017年6月30日に運行が開始された地鉄1号線が走っている。長春市では、現在、6路線が運行されており、4路線が建設中である。名称としてやや紛らわしいことに、地鉄とは別の（地上を走る）軌道交通「軽軌」（Light Rail）があり、それも「地鉄」と通称される場合がある。たとえば、地鉄3号線は正確には軽軌3号線である。その開通は地鉄1号線よりもかなり早い2002年10月30日であり、中国全体でみても最も早い「軽軌」であった。

翌29日には早速、市内の散策に出かけた。まず、「人民大街」を南へ下り右側にある「勝利公園」に入る。入口にある案内板によると、この公園は1915年に南満州鉄道株式会社（満鉄）によって建造された。当時の名称は「西公園」である。その後、幾度かの名称変更を経て、1948年に長春が解放されると、革命戦争の偉大なる勝利を記念して正式に「勝利公園」と命名された。私がはじめてこの公園を訪れたのは1997年5月1日、メーデーの祝日である。今回はウィークデーの金曜日だったが、多くの市民らが思い思いに楽しんでいた。入口正面には当時と変わらず、1970年7月1日に建立された高さ11.2メートルの毛沢東像が民衆を迎えていた（上写真参照）。1997年当時は無かったと記憶する大観覧車には年齢制限のため乗れず、残念だった。（続く）

■参考資料：『百度百科』他。

## ≡ 晩秋のカラコルムにて (8) ≡

吉光 清

大相撲秋場所は横綱大の里の逆転優勝で幕を閉じた。大の里は、6人目のモンゴル出身横綱「豊昇龍」と優勝決定戦までデッドヒートを繰り広げた。番付表を見たら、モンゴル出身の力士は、幕内力士42名中、5名であった。ちなみに他の外国出身の幕内出身力士もウクライナ、カザフスタン、ロシアからの4名がおり、日本の「国技」と称する大相撲でも、国際大会で優れた成績を残して人気が高いメジャーなプロスポーツと同様、グローバル化が進んでいる。「〇〇ファースト」などと言っても始まらないのである。

大相撲ファンにとっては、モンゴル出身力士たちは「旭天鵬」と「旭鷲山」を草分けとし、その後、「朝青龍」から「豊昇龍」までの横綱6人を輩出し、名勝負を繰り広げ、時には角界を支え、盛り上げてきたことは言わずもがなの歴史であろう。

多くの歴代記録を更新した「白鵬」だけでなく、「照ノ富士」、「逸之城」、「玉鷲(現役)」などは不屈の精神や人柄で高い人気を誇った(ている)。

### ■早朝の悪戦苦闘

レストランでの夕食後、ゲルに戻る途中で、トイレとシャワー室を確認した。シャワー室は個室トイレが並ぶ奥にあり、中は撥水加工のカーテンで仕切られただけの区画が二つだった。有難いことに、12番ゲルはトイレ/シャワー室に最も近く、40メートルほどの距離だった。

荷物を整理し、就寝前にシャワー室に出掛けた。暖かいお湯が出たが、足元がヌルヌルして快適でなく、温まれる筈も無いので、早々に引き上げ、ス

マホの充電をセットし、枕元にミネラルウォーターを置き、ダウンジャケットを着こみ、簡易シュラフの上に寝具を掛



宿泊した「12番」のゲル

け、夕方に買った小瓶のウオッカを就寝前に一口飲んだ。甘くて飲み易いがアルコール度数が高いので唇の内側がヒリヒリした。

いつもの如く、トイレのために起きて時計を見たら2時半だった。扉を開けたら、小雨が降っていた。重ね着をして、折り畳み傘で外へ出たが、街灯の弱い灯りでも足元の歩道はしっかり見えており、ぬかるんでもいなかった。

震え上がるほどに寒くはないが、ゲルに戻るまでには体が冷え、出入りした扉からの冷たい外気で、室内の気温も下がっている。

そのためか、4時半に再び、トイレに起きた。戻ってからストーブを確かめた。練炭が未だ赤かったので、その上に薪を載せて寝床へ入ったが、その後、寒いと思ったら、薪に着火せずに消えていた。薪は未だ残っていたので、手持ちの紙やけなしのマッチ、貴重なウオッカも使い、焚火の極意を発揮して炎の復活に努めたが、ストーブも薪も冷え切っていて着火する気配は全く無い。

目が冴えてしまい、さりとて起床する訳にもいかず、ただ横になっていたが、6時半に、台車の音がして、くだんの従業員二人がストーブを焚きに来了。ガスバーナーで薪に火が点いたら、ゲルの中が瞬く間に温かくなった。

### ■朝食と次の目的地・ウギーノール

8時を回ったのでレストランに向かった。雨が降っていないのは有難いが、雨粒が空中に浮かんでいる感じで、霧の中のように見通しが利かない。

ガイドさんたちをレストランで待たせてしまったかと思ったが、彼らは未だ来ていなかった。他のグループもおらず、一人の静かな朝食になった。

ポットに入った紅茶、アップルジュースがセットされ、捻じり棒形の揚げパン(ボールツォグ)、焼いたソーセージと玉子、麦芽パン、チーズが運ばれ



残り2本になったウオッカの小瓶

て来た。フルーツの皿には楕形に切ったリンゴ、ドラゴンフルーツ、葡萄、オレンジが載っていた。朝食を終えてゲルに戻ろうとしたところで、ガイドさんたちがやって来た。寝坊したものと見えた。

旅程表に拠れば、本日（9/26）の最初の目的地は「ウギー湖（ウギー・ノール）」である。地図ではアルハンガイ県ウギーノール郡にあり、ハラホリンから北西に70キロ余りで、周囲を広大な草原、河川、湿地に囲まれ、湖から流れ出た水はオルホン川に注ぎ、ロシアとの国境に向かっている。

ウギー湖のセールスポイントは、「ラムサール条約」に登録された、モンゴル国内の3つの湖沼のうちの1つということである。ラムサール条約とは、イランの都市ラームサル（ラムサール）にちなむ通称で、『特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地およびその動植物の保全を促進することを目的とする条約』のことで、1971年2月2日に制定され、1975年12月21日に発効した。1980年以降、およそ3年ごとに『ラムサール条約締約国会議』が開催されている。

ウギー湖の面積2,510ヘクタールの約40%は3メートル未満の深さで、ガンカモ類（カモ、ガチョウ、ハクチョウなど）を始めとする水鳥にとって、重要な繁殖地および中継地となっているという。筆者が熊本県玉名市に在住していた時期、隣接する荒尾市の干潟がラムサール条約に登録されて大きな話題になっていたことを思い出した（日本の登録数は54カ所）。

## ■ウギー湖を目指し、高原の道进行

宿泊したゲルを引き払い、駐車場までスーツケースを転がし、車に積み、ウギー湖を目指して、予定通りの9時に出発した。



枯れ草に覆われた赤茶色の高原の彼方に湖水が見えた

カラコルム（ハラホリン）郊外の道を走って暫くは、道の両側に緑の緩やかな斜面が広がり、ところどころに、草地の中に広く柵を巡らせて、その中に2、3のゲルが建っているのが見える。しかし、柵の中には人も家畜も見えない。家畜を囲いの外の放牧地に連れてゆき、放し飼いにし、必要の都度、柵の中に連れて帰るということだろうか。

やがて、道路は丘の頂上を結んだ尾根伝いになり、見通しが良くなったが、緑の草原は無くなり、赤茶けた土壌と枯れ草だけの単調な眺めになった。雲は厚く垂れ下がり、青空は無く、寒々しい。

舗装道路は時々方向を変えながら、直線的に続いていく。1度、車を停めて貰い、赤茶色の小石を拾った。行き先を示す道路標識などは勿論、無い。そろそろ、退屈になって来た。

出発して1時間ほど走ったところで、車が舗装道路から分かれて未舗装の道を走り始めた。車は時々、大きくバウンドし、分岐があると車を停めて、運転手とガイドさんが話し合っている。進行方向に確信がある訳では無さそうだった。

10時半に近づいたところ、遙か彼方に湖らしい姿が見えて来た。それから30分近く走って、ようやく湖畔に着き、間近に湖水を見ることが出来た。湖水は透明で、湖上を渡ってくる風はとても冷たい。昼食用に立ち寄ったツーリストキャンプだけでなく、入り江の向こうにも別のツーリストキャンプの施設が見えた。（つづく）

## ●資料：

- ・「地球の歩き方 モンゴル」（2024年～2025年版）、株式会社 地球の歩き方
- ・「ラムサール条約と条約湿地」：環境省ホームページ、[https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/About\\_RamarConvention.html](https://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/About_RamarConvention.html)



ウギー湖畔に建ち並ぶツーリストキャンプのゲル群

# 二郎爺さん、山を担ぎ、太陽を追いかう

訳：一瀬靖子／大槻一枝

昌平県の東南三十里のところに小さな石山がある。それは天空から落ちてきたかと思われるように、地面にはまり込んでいて、人々はこれを「小湯山」と呼んでいる。

小湯山から西方へ二里ぐらい離れたところに「大湯山」があり、大湯山村がこの大湯山にしっかりと寄り添っている。大小の湯山の周囲数十里は、トウモロコシ、小麦などの生産が盛んで、見渡す限りの豊かな平野である。遠く西北の方角には、九里山が長い蛇のように東から西へ伸びている。

この平坦な平野に、どうして大小三つの山がぼつん、ぼつんと姿を見せしているのだろうか？ それには一つの伝説が語り継がれている。

その当時、“二郎爺さん”という優しいお爺さんがいた。彼はこの数年、北方が干ばつで穀物の苗が枯れていくのを心配していた。人々は草の根、木の皮を食べて飢えをしのいでいた。二郎爺さんは二つの山を担ぎ上げて太陽をねじ伏せられないものかと考えた。もしそれができれば北方の気候は順調に推移し、あたり一面、緑の枝が繁り作物も実り、豊かになって人々の暮らしは楽になるだろう。

そこで二郎爺さんは早速、天秤棒を用意し、手近にあった二つの山を担ぎ上げた。天秤棒の前には虎山を、後ろには竜山を担ぎ、夜を日に継いで真っすぐ北へ進んだ。命がけで太陽を追いか、人々を救おうとしたのである。

彼はひたすら歩き続けた。どのくらい歩いただろう。ある日、彼は昌平州というところに着いた。

北は陸続き、南は海に面し、海には竜が住むという深淵を抱えている。神通力を持った二郎爺さんも此処まで来るとさすがに疲れ果て、天秤棒を右の肩から

左の肩に担ぎなおそうとした。彼は体をねじり天秤棒の位置を変えて、竜山を前に、虎山は後ろに担ごうとした。ところがその時、急に天秤棒が折れて、前後に担いだ二つの山が地面に落ちてしまった。二つの山は竜山も、虎山も靈気に満ちた山である。竜山は地に落ちるとたちまち乾燥して死の山となり、後方の虎山は竜の淵に沈んでしまった。死んだ竜山は長く伸びて、現在の九里山となり、大辛峰村の北に横たわった。生気を失った虎山は現在の大湯山となった。大湯山村から北を望むと、伏せた姿で頭をもたげ、二本の前足の爪で地面を搔いている虎のように見える。

二郎爺さんは虎山や竜山を背負いきれず、深くため息をついて地面に座り込んでしまった。彼は靴を脱ぎ、逆さまにすると、“ド、ドーッ”という音とともに、中から泥が吐き出された。これが現在の小湯山である。二郎爺さんは額の汗をぬぐった。汗は地面を流れて九泉に染み入った。汗は今でもふつふつと流れ出ている。これが名高い小湯山温泉である。

聞くとところによると、二郎爺さんは桃が赤くなり、柳が緑になるころになると此処へやって来る。この温泉の湯には病を癒す効果があるという。蒙古族の人々までがやって来て、“桃花水”の恩恵にあずかるという。

(昌平区に伝わる民話)

收集整理：謝 明江

## ■編者注：

- 1) 現在は北京市が所管する「昌平区」になっている。北京市の西北部、人口はおよそ227万人(2024年末)
- 2) 現在の「河北省・遼寧省・北京市・天津市」を中心とする一帯は前漢の時代には「幽州」とされ、隋の時代に、その中に「昌平県」が置かれた。
- 3) 区内には「明十三陵」、「八達嶺長城」、「小湯山温泉」などの歴史的遺跡や観光地がある。



「昌平区」の位置(「百度百科」より)

## 私の心に残る旅⑪ーシルクロードの探検（その4）

樊 婷婷 (fán tíng tíng)

5月1日（7日目 午後）

午前中は張掖賓館のすぐ近くの大仏寺、木塔寺および張掖市内観光をしました。

午後、一行は張掖を後にして、観光バスで西寧に向かいました。距離は約380kmですが、祁連山脈の大坂山を越えなければなりません。皆さんは海拔4,200mの雪山を越えなければと聞いたら、「大丈夫ですか」「危険ではないですか」と心配そうな顔で私とガイドに訊きました。

ガイドさんは「トンネルの中を通るから、実際は3,800mで、ご心配は要りません」と説明したので、皆さんはやっと安心して、車窓から祁連山脈、黄土高原、羊やヤクの群れの風景を楽しみながら、お喋りに花を咲かせていました。

ところが、途中で交通警察から「雪でトンネルが壊れ、交通止めになったので、すべての車は旧道である山道で山を越えなさい」という知らせが来ました。旧道の山道は狭いし、雨で道路が崩れた所もあり、更に4,200mの山の天辺を越えなければなりません。これを聞いて皆さんはまた心配になって、不安な空気がバスの中に漂っています。しかし、どうしようもありません。命を運転手さんに預けるしかありません。高所恐怖症の人はもちろん、私でさえも、車窓から外の断崖絶壁を覗きますと、思わず目を瞑らずにはいられません。特に対向車と擦れ違う時に私の左の方は僅か数センチで下に落ちそうになり、冷や汗が止まりませんでした。できることは、心の中で早くこの山を越えるようにと、ひたすら祈るだけです。

バスがやっと山の頂上に近づいた時、また、急に連絡が入ってきて、今度は前方の道が崩れたので、車の重量を減らすため、人は全部降りて歩きなさいと。4,200mの山の上で、半分以上の人は軽い高山病にかかり、頭が痛く、両足には全然力が入っていないので、車の中で座っているだけでも大変ですが、まさか、降りて歩くとは想像するこ



「祁連山脈」(撮影: 呉霞さん)

ともできないことでした。皆さんをここまで連れて来なければよかったのに、と後悔もしました。

私たちはふらふらしながら、バスから降りて歩き出しました。一步一步ゆっくり歩かないと、息がきれそうです。私はハイヒールのせいでしょうか、岩の上で転んでしまって、黄土高原と頬づりをしました。20分ぐらい歩いた後、ようやく車に乗ることができました。たぶん、午前中、みんなで一生懸命に釈迦様にお祈りしたおかげでしょうか、気分が悪くなった人はいましたが、全員無事に車に戻ることができました。私が骨折しなくて済んだこともそのおかげでしょう。

張掖から西寧に向かっている途中、車窓からチベット族の天葬台を見ました。遠くてよく見えなかったですが、チベット族のお葬式は「天葬」で、遺体を山頂などに持って行って、鷹などの餌にするので、「鳥葬」とも呼ばれています。チベットに生まれなくてよかったなと思ったりしました。

6時半頃、西寧のホテル伊爾頓大酒店に到着しました。今日は大変な一日だったので、皆さんは心身ともに疲れたようで、夕飯後、各自はすぐ自分の部屋に戻りました。私とZ社長はホテルの喫茶店に行ってコーヒーを飲みながら、この長い一日の体験や感想を話し合いました。喫茶店にグラインドピアノがあり、お客さんは自由に弾くことが

できますので、私はなぜか知りませんが、頭がふらふらしながらも急に弾きたくなくて、恥知らずに3、4曲を弾きました。海拔が高いため、耳が曇っていたので、自分は音が小さいと思いましたが、実はすごく大きくて、他のお客さんから煩いと言われてしまい、恥をかきました。

## 5月2日（8日目）

8時に西寧のホテル伊爾頓大酒店から出発しました。今日はまず、西寧と青海湖の間に位置する日月山の頂にある「日月亭」の見学です。「日月亭」とは、黄土高原と青蔵高原の分水嶺にある「日亭」と「月亭」という二つの亭のことで、その中には、かつて唐の時代に、チベットに嫁いだ唐の皇帝のお姫様である文成公主を祀っています。ここから西がチベットです。641年、文成公主は仏像や経典などを携えて吐蕃に降嫁した時、ここで唐に別れを告げ、草原や青海湖を目にして涙したそうです。嫁いでいく時に、周りに比べてとても繁栄している唐から穀物、豆、野菜等の種や、牛や羊および様々な技術を一緒にチベットに持ち込み、唐とチベットの友好に大きな貢献をしたと言われ、今でも、チベットの所々に祀られ、チベットの人々に観音菩薩の化身として崇められています。

「日月亭」は標高約3,500mで、景色は非常に素晴らしいです。私たちはその中に入って見学しました。周りの壁や屋上には「文成公主」に関する物語が描かれています。色彩はとてもきれいで、人物も生き生きとしている壁画です。女性の力は時には世の中を変えるものだと感じました。

「日月亭」を後にして、一行は青海湖へ向かいしました。途中、チベット族が経営しているレストランでヤクなどのチベット料理を食べました。さっぱりして美味しかったです。

青海湖に到着したのは午後1時半頃でした。青海湖と言えば、中国で最大、世界で2番目に大きい内陸塩湖です。湖面の標高は3,196m、面積4,583km<sup>2</sup>、湖岸線の長さは約360kmに達しています。湖水は塩分が高いため、岸辺が白く縁取られた所が多くあります。湖の西の方には塩の採掘所があります。

青海湖公園の入り口でチベット族の青年たちの



「青海湖公園」(撮影: 呉霞さん)

民族舞踊を見学しました。とても陽気で、色っぽくて、その服装も鮮やかです。私たちは湖に沿って散歩しながら現地ガイドさんからいろいろ説明を聞きました。現地の少数民族は青海湖を「聖湖」と思い、その中で泳いではいけない、湖の魚も「聖魚」なので、食べてはいけないそうです。私は小さい時から「青海湖は中国で一番きれいな湖だ」と聞いて、ずっと憧れてぜひ一度見に行きたいと思っていましたが、今日は長年の夢をやっと実現することができました。見渡す限り広く、青く美しい湖に見惚れて感動しました。7月、8月になると、湖畔には草花が咲き乱れ、満開の菜の花が黄色い絨毯のように一面に広がるそうですが、まだ、5月なので花の代わりに一面に黄土が広がっています。湖の中央に鳥島があり、数多くの野鳥が世界各地から飛来することも有名です。時間の関係で、私たちは船で鳥島まで行けませんでした。遠くから見ると、島全体は鳥に覆われたようでした。

ホテル伊爾頓大酒店に戻ったのは夕方の6時半頃です。まず部屋に行って顔を洗い、7時に全員はホテルのレストランに集合し、現地ガイドさんを入れて盛大なパーティーを行ないました。本当は最後の夜(次の日)にやりたかったのですが、翌日は飛行機の到着時間が遅くなり、出来なくなってしまうからです。

上海旅行社のZ社長はまた美味しい料理やお酒をたくさん用意してくれて、皆さんはそれぞれ旅行の感想やZ社長および私への感謝の言葉を話してくれました。皆さんの喜んで満足した表情を見て、私も今回の旅を実施してよかったと実感しました。

劍門蜀道劍門関旅游区は、有名な「劍門関楼」から名前を借りて開発した「旅游区」だと思う。崖上の展望台やロープウェイなどの観光施設は「蜀の古道」とは無関係だ。当局の知恵者が「劍門関楼」の周りの地形をうまく利用して遊歩道を整備したのだろう。

ロープウェイで尾根上に運ばれたのち、その整備された遊歩道を暫く進むと、崖の末端に行き着いた。目前は空間が広がる谷間になっていて、今いるところから栈道となって崖を下っている。栈道の行く末は谷底に沿って進み、「劍門関」に続いている。

崖上のすぐそばに対岸に行くことができる「高空滑索」の乗り場があった。日本ではこの種の乗り物をジップライン(ZIP-LINE)と呼ぶらしい。崖から崖に張ったワイヤーに滑車を掛け、そこに人間がぶら下がる。そして主に高低差による重力で一気に対岸に渡るのだ。この乗り物も年齢制限があり 60 歳以上は不可だ。「百度」によると長さ 180m、高さ 170m だ



「天梯峡栈道」を下る。右上には栈道を支える柱が有る



下ってきた「天梯峡栈道」を見上げる

そうだ。心もとない仕掛けで、空間に身体がむき出しとなり、見ただけで十分怖い。パラグライダーが趣味というツアーメンバーのある女性は、しきりと乗りたがっていたが、年齢制限でダメである。

懸崖の端からは「蜀の栈道」を模した栈道「天梯峡栈道」がつづら折りに谷底に続いている。栈道の大枠は木造の角材である。崖に穿った横穴に角材を差し込んで支柱の基礎台とし、そこから縦柱を建て、手摺と床板を組み込んで、栈道の形になっている。

ツアー初日に行った名月峡の“元祖”「蜀の栈道」では岩盤から立ち上がった縦の柱は見なかったが、この観光用栈道では要所要所に崖の途中から立ち上がった柱も有った。この栈道は遠目には危なっかしいが、歩くと横幅が広くしっかりしており、不安感はなかった。

空中に飛び出した栈道から景色に見とれて歩いていると、いつしか谷底に着いて、吊橋で対岸に渡る。いよいよ「劍門関楼」へ続く谷底の隘路を進む。

到着した「劍門関楼」はどっしりした外観で、いかにも三国志時代を偲ばせる楼門だった。けれどもウィキペディアによれば、「劍門関には明代に楼閣が建てられ、額には「天下第一関」と大書され、三国時代の歴史をしのぶ名勝として人気を博していたが、2006 年 2 月 12 日に火災で焼失。その後、修復されたが 2008 年の四川大地震により倒壊した。2015 年に中国の 5A 級観光地に認定された」、とのことで現在の城門は再建されたものだ。

それでも立派な風格で、背後の借景も手伝って人気の観光名所なのはうなずける。旅行会社からは歴史的背景の説明はほとんどなかったので、こうして後付けでいろいろ調べているわけである。もっとも行く前に自分で調べるべきではあるが、行ってみて初めて見聞することもあるので、事前学習では行き届かないこともある。

栈道を下って谷底の道となる。行く先には劍門関楼がそびえていた。門のアーチに続く階段を登る。そ



関楼展望台からの「劍門関楼」



「劍門関楼」の上部建築物

してアーチを抜けた。振り返ると建物に登れるようになっていたので、行ってみた。上モノの建築物は木造で遠くから見たより、軽やかに見えた。

劍門関楼を後にして少し進むと旅游区の南門が現れて、ここから外に出た。こうして「劍門関旅游区」の観光を終えた。外に出るとお土産屋が並ぶ商店街となり、道路は劍門関鎮の街並みに続いていた。我々のホテル「蜀門客棧」は、すぐ近くだった。

翌日3月20日はコノテガシワの古樹巡りだ。コノテガシワとは、「中国北部原産のヒノキ科の常緑小高樹で、枝が平たく手のひらを立てたように見えるので〈兎手柏〉という」。ネットの「コトバンク」で仕入れた知識である。カシワは日本の漢字では柏だが、中国の「柏」はヒノキ科コノテガシワのこと。杉の葉のような針葉なのでカシワ餅は作れない。

どこの国でもそうだと思うが、自動車が普及する以前は、主要街道沿いに並木を植えて暑さや、風雨から旅人を守った。蜀の古道で選ばれたのは現地で自生するコノテガシワ。歴代支配者が保護を命じ、伐採を禁止した。秦の始皇帝の頃から数次にわたって植

林が続いており、現在も健在だ。しかし老樹ゆえ衰えている株もあり、薬品を「点滴」して養生しているところもあった。

高校のとき漢文で習った「已に見る松柏の摧(くだ)かれて薪と爲るを」の柏はコノテガシワのことだったのだ。

「人民網日本語版」によれば、「劍門蜀道」には、樹齢100年以上の古樹が2万391本あり、そのうち「劍閣県」内にあるのは7,778本で、樹齢の平均1050年。最も古い「劍閣柏」と「帥大柏」と名付けられた樹の樹齢は約2300年だそう。

今回のツアーでもすでに歩いたハイキングコースのそちこちで、コノデカシワの部分的な並木を見かけた。

コノデカシワの生え方は幹の途中から枝分かれするので、杉の木やメタセコイヤのように円錐形の一本立ちにはならない。この並木道を縦に見ても整然とした景観ではなく、自由に生えてしまった感がある。中国人の気質みたいだ。

大きな樹にはほとんど管理番号札が掛かってい



「翠雲廊」園内の様子。赤布の樹は樹齢千年の「夫婦柏」だそう



漢陽飛鳳鎮近の巨木。枝が9つの龍が舞うようで九龍柏という。



幼稚園児の母子ピクニックだろうか。コノデカシワの林内で

た。樹齢 1200 年とか、樹齢 1000 年とか書いてある。1200 年と 1000 年の差はどうやって判別したのだろう。見た目には同じように見えたが…。

3 月 20 日、朝食後ホテルをバスで出発し、1 時間くらい南へ行くと「翠雲廊」に着いた。ここはコノテガシワの保存状態の良い場所を公園化したところだ。名称の由来は、清代の詩人喬波がコノテガシワの巨樹群を「翠雲回廊」と詠んだことに依るといふ。入園するとすぐに巨樹の連なる小道になった。

なるほど枝ぶり豊かなコノテガシワの巨樹が遊歩道に沿って並んでいる。樹の幹にかかる管理札を見ると、軒並み 1000 年越えである。感心することしきりである。少し奥に進むと観光サービスだろう、三国志時代の武将の衣装を着込んで、隈取の化粧を施した髭男に歓迎される。槍を持ったその男と一緒に写真を撮る人も居て笑わせる。彼の背後の巨樹コノテガシワの並木道が舞台になって、観光客は三国志時代に浸れるというわけだ。

公園としての「翠雲廊」はさして広くはなく 1 時間ほどで回ることができた。



三面護岸の河川で情緒に欠ける普安鎮の街並み。



(左)普安鎮近くの00001号の札 (右)コノデカシワの養生点滴

再びバスに乗り、1 時間ほどで、コノテガシワの並木道がよく残っている漢陽鎮に行く。ここから再びハイキング道を歩く。なるほど「翠雲廊」にあるのと遜色ないコノテガシワがたくさん有る。別格のコノテガシワ、年代物の樹には、赤い布片が幹周りに回してあった。日本のしめ縄のようなものか。

ハイキング終わりの頃になって、コノテガシワの管理番号数字がどんどん若くなっているのに気がついた。そして、とうとう最後の「51082300001」を見ると、コノテガシワのハイキング道は終わりとなった。

畑路のようなところから段差を降り立つと、普安鎮市街の舗装道路だった。ここから旅行会社が手配したバスを呼ぶ。面白いことに、用意したバスは、普通の路線バス車両であった。これに運ばれること数分でこの日のホテル「劍閣賓館」に着いた。ホテルの所在地の普安鎮は人通りも多く、かなり大きな街に見えた。街の作りは、渇水した 3 面護岸の川沿いにビルが立ち並んで、面白みがなかった。いかにも中国の地方都市の顔つきだった。それでも明代由来の「鐘鼓楼」がよかった。

帰ってきて思うに、旅行会社のツアーとして、よく出来た企画だと思ふ。我々は“蜀の古道良いとこ取り”の、つまみ食いだったが、全コースを歩く人達もいて、中国人にも親しまれているようだ。

ある日のハイキングの途中で、高齢(私と同年か)の大学教授と、その教え子らしい男女の若者数人とすれ違った。聞くと全コース走破らしいグループで、しばし交歓し、これから先の道中をおたがい励ましあった。当然、この間のやり取りはガイド姐の通訳である。

(終わり)

■参考：百度百科

# 悠久の流れ多摩川

和田 宏

## 〈東歌〉

多摩川は、山梨県笠取山の小さなせせらぎを源流とし、東京都と神奈川県の間を流れて羽田空港脇の東京湾へ注ぐ全長 138km もある一級河川だ。多摩川は古くから洪水が絶えず、“暴れ川”として知られていた。最近では、1974 年 9 月 1 日の水害で、東京都狛江市で左岸堤防が決壊し、死傷者は出なかったものの民家 19 戸が流出した。一方で、多摩川は、人々の生活にも深く結びついていた。日本最古の和歌集である『万葉集』の巻 14、東歌（あずまうた）に収録されている詠み人知らずの短歌を紹介しよう。

♪多麻河伯尔左良須豆久利佐良左良尔  
奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎

（多摩川に さらす手作り さらさらに  
何ぞこの児の ここかなしき）

多摩川畔の古代の農村では手作りの麻布が「調」として多く貢納され、その布を白くするために、清流に洗い、日にさらすのは、農村の女性の共同の仕事だった。その「サラス」の音にかけて“サラサラニどうしてこの娘がこんなにもたまらなく可愛いのだろうか”と、歌っているのだ。水や日に晒して布を柔らかく且つ強くするのは麻の特徴である。多摩川の川辺で古代の税の一種である「調」の布を晒している様子が偲ばれる。

飛鳥時代から奈良時代にかけて行われた日本の税制度では、「租（そ）」、「庸（よう）」、「調（ちょう）」の 3 つがあった。「租」は収穫した米（穀物）の一部を納める税、「庸」は都で働く労役、「調」は各地の特産物（布や絹、塩、海産物など）を納める税だった。多摩川の近くには、“調布”という地名があり、この付近が、朝廷に貢進するための布を産出して

いた土地であることを物語っている。多摩と言う地名は、麻が沢山採れたので、“麻が多い”で、多摩となったと言われている。玉川は、川は玉（ぎょく）のように美しく大事だと言う意味で、玉川上水や二子玉川駅と言った施設名や地名として残っている。

## 〈白村江の戦い〉

それでは、どんな人々<sup>タ</sup>が布を織ったり晒したりしていたのだろうか？ 多摩川中流の左岸には、東京都狛江市がある。埼玉県日高市には高麗川という地名や JR 八高線の高麗川駅、西武池袋線の高麗駅、それに高麗神社もある。この 2 つの「狛江（こまえ）」と「高麗（こま）」は、朝鮮半島から渡来して来た人達が入植した地である。その背景には、ちょっとした戦争があった。『白村江の戦い（663 年）』である。この戦いは、天智朝の日本・百済遺民の連合軍対唐・新羅連合軍が朝鮮半島南部にある大きな川（現在の錦江）の河口で戦った海戦で、日本・百済側の完敗に終わった。天智朝の日本兵と共に、滅亡した百済の王族はじめ、軍人や大勢の一般人が朝鮮半島を逃れて日本に流れ込んで来た。こうした渡来人は、多摩川沿いの狛江市や日高市の高麗川などに定着した。渡来人は技術者であり、絹織物の技術を伝えたと思料される。狛江の辺りは布織物が盛んで、織物に因んだ調布、染地、布田、砧などの地名がある。こうした渡来人の指導を受けた土地の女性たちが多摩川で布を晒していたのではないだろうか。

この短歌の作者は、詠み人知らずの東歌とはなっているものの、短歌を詠むには、万葉仮名が書け、「五・七・五・七・七」の字数を守り、“一層”と言う意味の“更に”の言葉と、川の流れで布をサラサラと晒すという擬音語を重ねて



狛江市の「玉川歌碑」

使うユーモアも備えたインテリ男性であろう。これを、土地の人々が面白がって歌いながら布を晒していたのではないだろうか。“土地の歌謡・民謡

のような口承の歌”と考えられる。

白村江の戦いの敗戦を教訓に、日本の大和政権は、それまでの朝鮮半島への国外進出を断念し、国内の整備と国防力強化に力を入れるようになった。天智天皇（626～672）は、唐の制度を学び、中央集権的な律令国家の形成に力を入れるようになった。百済帰化人の協力の下、対馬や北部九州の大宰府や瀬戸内海沿いの西日本各地に朝鮮式の山城を築き、北部九州沿岸には、防人（さきもり）を配備した。

〈2つの歌碑〉

この“♪多摩川に さらす手作り さらさらに 何ぞこの児の ここだかなしき”の短歌を彫り込んだ、大きな石の碑が、多摩川左岸の2ヶ所に建てられている。①狛江市中和泉4丁目14号と、②調布市多摩川5丁目37番1号である。

筆者は、小田急線「狛江」駅から西へ約1000mの所にある①の歌碑と、京王相模原線「京王多摩川」駅から南へ約300mの所にある②の歌碑まで、電車を乗り継いで尋ね歩き、写真を撮って来た。

①の狛江市の歌碑は、当初は1805年に江戸時代の老中・松平定信の揮毫で建てられたが、1829年の洪水で流出し、その後の1924

年、渋沢栄一ら有志の協力で拓本を基に再建され、現在の位置に建てられて、「玉川歌碑」と書いてある。

②の調布市の万葉歌碑は、東京

調布ロータリークラブが、創立四十周年記念事業として2003年に建立した。

この歌碑には、別のもう一首の東歌も彫り込まれている。

♪赤駒を 山野に放し 捕りかにて  
多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ

775年、防人（さきもり）交替の時の武蔵国豊島群出身の防人の妻の歌である。防人は九州、壱岐、対馬の辺要を守る兵士で、東国から徴集され、3年交替で九州の大宰府に送られた。

防人は馬で行くことを許されていたので、遠い旅路をせめて馬で行かせたいという妻の心であったが、折から放牧期であったため山野に放している赤馬を捕まえられず、多摩の横山の道を歩いて行かせねばならなくなったという妻の嘆きが歌われている。



萬葉集のイメージ写真(イメージマート)

## 大連会に出席して

寺西 俊英

通称「大連会」、正式名称は「老虎会」といいます。ご承知の方も多いと思いますが、老虎とは年老いた虎ではなく、「虎」のことを言いますね。大連市の海岸で岩が海に向かってゴツゴツと突き出るような景勝地があり、そのあたりを「老虎灘<sup>ろうこたん</sup>」と呼んでいます。観光客で賑わう大連の名所の一つです。「老虎会」は、ここで幼少期を過ごした方々の懇親会なのです。

大連は、日本が旅順港に近い203高地の攻防などで有名な日露戦争（1904年～05年）でロシアに勝利し、占領したところから日本に知られるようになりましたが、その昔は名もなき漁村でした。

日本の統治後、老虎灘地方から今の<sup>てい</sup>大連駅の方向に住宅地がずっと続き、電車も走って大連市は発展しました。日本人小学校や中学校が点在し、大連神社まで造られたのです。

「大連会」の皆さんは、この大連市で生まれ、小学校や中学校に通った同窓生で、終戦まではここが母国だった方々なのです。それから80年経ち平和な日本にお住まいですが、舞鶴港や佐世保港に引き揚げた当時は、家などの財産はすべて没収され、着の身着のままの状況で帰国されました。

引き揚げ船から、夢でしか見たことの無かった母国の島影を見たときは、多くの方は涙を禁じ得なかったと話しておられました。筆者は、この大連市で日系企業の総経理を2年間務めた縁で、この大連会の特別会員に迎えられ、年三回の会合で皆様のご苦労話や楽しい思い出話などを身近に伺う機会を頂いているのです。

さて、9月8日には3か月ぶりに新橋の「新橋<sup>しんきょう</sup>亭<sup>てい</sup>」で例会が開かれました。3月そして6月の例会と同じ私を入れた6人のメンバーが5階502号室に集まりました。ほとんどが都内からですが、島田さんと言われる方は、何と甲府から「あずさ」に乗って毎回一人で参加されます。彼女は御年96歳で、筆者は、お会いする度に元気を頂いています。



参加者5人の年齢をご紹介しますと、96歳が3人、91歳が1人、87歳が1人という具合です。90歳台は皆女性です。96歳の一瀬さんと言われる方は、未だに〈かつぼれ〉を元気に踊られ、高齢者施設などに行って皆さんに元気を差し上げているとか。同じく会員の大槻さんと一緒に昔話を翻訳されていて、毎号のわんりに掲載させて頂いています。

「新橋亭」は有名な中華料理店ですが、従業員が小皿に取り分けた料理を配膳してくれ、それを頂きながら昔話に花が咲きます。私は戦前の大連に関心があり、皆さんが語る、中山広場（旧大広場）、人民路（旧山県通り）、大連賓館（大連ヤマトホテル）、勝利橋（日本橋）三越百貨店などの話に耳を傾け楽しいひと時を過ごします。

筆者が入会して7、8年経ちますが、当時は毎回十数名が参加して、大皿に盛りつけた料理が運ばれて丸いテーブルを回しながら、各自が小皿に取り分けていたものですが、毎年のように少しずつ参加者が減って来て、この6人での例会がいつまで続くのかという話がこの一年持ち上がっているのです。とりあえず次回は12月第2月曜日に当たる8日に、元気で会いましょう！と言いながら散会しました。このメンバーの皆さまがまだまだ元気で過ごされるように、と願いながら地下鉄銀座線で帰宅の途につきました。

第 228 話 方向違い

旅人：「洛陽まで何キロだね？」

馬方：「20 キロでさあ」

旅人：「この馬車に乗れるかね？」

馬方：「良いですよ！」

旅人：「有り難い、やってくれ」

暫くして、

旅人：「随分乗って来たけど、洛陽まであと何キロだね？」

馬方：「30 キロですよ」

旅人：「なんだって!？」

馬方：「旦那、何処へ行くんですかね？」

旅人：「洛陽だよ！」

馬方：「何で早くいわなかったんですかい！」

第 229 話 ロバを担ぐ

親子が街へ出かけた。父親はロバに乗り、子供が手綱を持って後からついて歩いていた。

それを見た町の人と言った：「自分がロバに乗って、子供を歩かせるなんて、優しさのない親だなあ」

それを聞いた父親は、その後、子供をロバに乗せて、自分はロバの後からついて歩いた。しばらく行くと、又、町の人と言葉が聞こえて来た：「まったく可笑しな話だ。子供がロバに乗って、老人が後からついて歩くなんて」

それを聞くと、父親は自分も子供と一緒にロバの背に乗って歩き出したが、直ぐに、また一人の人が笑いながら話すのを聞いた：「小さなロバに二人の人間が乗るとは、なんて可哀そうなロバなんだ」

それで二人は、直ぐにロバから下りて一緒に歩き出した。すると、また一人が話すのを聞いた：「おかしい人たちだ。ロバがいるのに、乗らないで歩くなんて！」

親子はどうしたら良いか困ったが、仕方がないので、ロバの足を縛り、天秤棒で担いで街に入った。

ロバは重いし、人の邪魔になるといけないので、「獣が来たぞ」と叫びながら歩いた。

第 230 話 殺鼠剤

その昔、ある人が小さな紙包みを取り出し、周りの人に向かって、叫んでいた：「これは、我が家伝来の鼠専門の駆除剤で、鼠が怖れる薬だよ。鼠の身体に振れるとすぐに死んでしまうんだぞ」

聞いていた人が訊いた：「その薬はどうやって使うんだね？」

その男は答えた：「使い方はすごく簡単だ。この薬を一滴、鼠の口に垂らせばそれで終わりだ！」

第 231 話 水を捨てる

おじさんの妻が親戚の家に出かけてしまったので、料理をしてくれる人がいなくなり、おじさんは仕方なく、自分で作ることにした。

おじさんが台所へ行って麺を作ろうとしたが、麺こね鉢にはきれいな水がいっぱいに入っていた。その水を水桶に戻そうとするが、水桶もやはりいっぱいだった。おじさんは暫く考えて、良いことを思いついた：先ず水桶の水を、家の前の小さな淵に捨て、それから麺こね鉢の水を水桶に入れば、鉢が使える。

彼は水がいっぱい入った水桶を家の外の淵まで運んでみると、淵にも水が満々としていて、そこから一筋の水が外へ流れ出ていた。

おじさんは三日三晩、淵の傍に立って待ち続けた。四日目に妻が帰って来て、淵の傍に立っているおじさんを見て訊いた：「お前さん、そこで何をしているのさ!」

おじさんは答えた：「淵の水が枯れるのを待っていたんだ。淵の水が流れ出て無くなれば、そこに水桶の水を捨てようと思うんだ。水桶が空けば、そこに麺こね鉢の水を捨てて、鉢を使おうと思っているんだよ」

## みんなの広場

### ●徒然なるままに 中国語のオノマトペを考える

後藤 芳昭

オノマトペとは、言語教育上の幼児教育用の言葉と考えていた。汪汪（ワンワン）、喵喵（にゃーにゃー）、雨纷纷（雨がしとしと降る）夜沉沉（夜が深々と更ける）など。

しかし、最近のオノマトペ研究者、藤野義孝氏によると、その効用は、ただ使っているだけで心と脳がぐんぐん育つ。幼児教育にもオノマトペを音読すると、脳が刺激され、記憶力、やる気アップにつながり、「好き」、「面白い」といった気持ちにスイッチがはいるそうだ。（「心と脳がぐんぐん育つ！ わくわくおんどく」藤野義孝著、高橋書店 2022 年）

とすると、これは幼児教育のみならず成人教育にも通用する見解ではないかと思われる。

私は、今でも「パパ、背中をピシッ！ と伸ばして！」と愚妻にしょっちゅういびられている。

雨纷纷は、清明时节 雨纷纷で始まる杜牧の「清明」、夜沉沉は、秋千院落 夜沉沉で終わる蘇軾の「春夜」、共に七言絶句である。

わりりい薬膳料理講師の趙迪先生によると文字を重ねる表現は、古くは、「詩経」に始まるとのこと。

詩経の周南 1 「关雎」は、次のように詠う。

关关雎鳩（くっくつと鳴くみさご鳥）

在河之中（河の中で呼びかわす）

窈窕淑女（はるかゆかしい乙女ごは）

君子好逑（殿方のよき妻となるひと）

筆者が主催する多摩の会'12 の会員福島裕子女士は、今流行の漫画本では、オノマトペが躍動していると指摘する。2025 年 6 月 6 日付け朝日新聞朝刊では、山田紳氏が別姓問題で紛糾する国会をオノマトペで見事風刺。

もう、オノマトペが、単なる幼児向けの言語だとは、誰にも言わせない。

### ▶ 薬膳料理講習会のご案内 ◀

- ・日時：11 月 20 日 10：00～
- ・場所：麻生市民館 料理室
- ・講師：趙 迪
- ・費用：2000 円
- ・持物：エプロン・三角巾・手拭き

~~~~~

第 21 回「国際水墨芸術展」

併催「国際芸術家展 yokohama2025」

場所：横浜市民ギャラリー 2 階
（横浜市西区宮崎町 26 番地 1）
☎ 045-315-2828

JR 桜木町駅から無料シャトルバスあり）

展示期間：10 月 8 日（水）～10 月 13 日（月）

10：00～18：00

最終日 15：00 終了

★ 8 日（水）、午後 3 時半開幕式
12 時以後に絵画講座や交流イベント予定。

★ 詳細は 080-5017-9518 満柏

◇満柏画伯の漢訳俳句◇

草枯れて

狐の飛脚

通りけり

与謝野蕪村

huāng yě cǎo kū làn

荒野草枯爛

yě hú zǒu rú fēi

野狐走如飛

【わんりいの催し】

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！
身体のを抜いて気持ちよく発声しよう！
声は健康のバロメーター!!

*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：玉川学園コミュニティーC 多目的室 3
- 日時：10月14日（火） 10：00～11：30
11月 4日（火） 10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：2,000 円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15 名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

### ∞ ∞ わんりいの中国語勉強会 ∞ ∞

- 場所：鶴川市民センター
- 日時：毎週火曜日 14：00～16：00
- 講師：郁 唯（天津師範大学卒業）
- 会費：5000 円（会場費・講師謝礼）
- 定員：10 名（原則として）
- 申込：柳田 ☎090-4677-7793  
e-mail:yanagita\_hi@yahoo.co.jp



### ■定例会 代表宅

- ▼10月9日（木）13：45～
- ▼11月6日（木）13：45～

### ■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼11月号 11月3日（祝・月）
- ▼12月号 未 定

## ☆☆ 編集後記 ☆☆

昔から人々がよく口にする、「暑さ寒さも彼岸まで」とは、本当に正確な言い伝えですね。観測史上最多の猛暑日を記録した9月も、秋分の日が近づくと、朝夕の空の色に、風の気配にふと秋を感じるようになり、23日を過ぎると、日中は暑くても朝夕には確かな秋を楽しめるようになりました。涼しさも8月、9月の暑さと比べればにすぎず、実際、気温は3～4年前の同じ時期より随分高いそうです。それでも、秋が来ると言うことは、地球はまだ生きているということでしょうか。今後の私たちの覚悟次第では、地球にも回復の余地があるということ。少しずつでも温暖化阻止の活動を進めましょう。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎いたします

年会費：1800 円、入会金なし

郵便局振替口座:00180-5-134011 わんりい

10月以降の入会は、当年度会費 1000 円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 307 号の主な目次

菓膳のお話（7）	2
中国そぞろある記（2）	3
晩秋のカラコルムにて（8）	5
二郎じいさん、山を担ぎ、太陽を追ひ払う ..7	
私の心に残る旅⑪	
「シルクロードの探検」（その4）8	
蜀の古道（4） 劍門関樓と翠雲廊	10
悠久の流れ多摩川	13
大連会に出席して	15
中国の笑い話	16
みんなの広場	17
‘わんりい’ の催し・お知らせ	18